梁上の足

若杉鳥子

青空文庫

晝間、街から持つて來た昂奮が、夜中私を睡らせなかつた。
おまけに、腦天を紛碎しさうな鋲締機の足踏みが、間斷なく私の妄想の伴奏をした。

私が、骨組み許りのビルヂングの作業場の前を通りかゝると、其處には今しがた何か異變でもあつたと見えて、夥しい人間が集まつて急しく動作してゐた。多分檢屍官でゞもあろう白い服を被た役人と巡査とを乘せたオートバイが、その前に止まると、今迄梁の上に上つてゐた黒い人影は、蜘蛛の子のやうに散つてしまつた。

すると、鐵骨と鐵骨との間に架した横木の上に、一人の勞働者らしい人間が横たはつてゐる。往來の方へは蹠を向けてゐるので、その脛に捲きついた黒つぽい股引きの他は何も見る事は出來なかつた。

群衆は、殘照に彩られたビルヂングを見上げながら、屍體の引き下ろされるのを待つてゐた。

「あの男は、獨り者なんですかい？」

「もう相當の年配らしいですよ。親も妻子もあるでせうがなあ」

「どういふもんでせうな斯んな場合は、會社の方から、幾分遺族の扶助料でも出すもんでせうかなあ……」

「いゝやあ……さういふ事は先ず絶對にないといつていゝでせうな、感電なんてかういふ場

合は、大てい震死者それ自身の過失が多いですからね」

「よくよく運の悪い廻り合せです、もう三十分も無事なら、あの男は仕事をすませて、元氣な顔で彼處を降りて歸っていつたんですがな……」

「實際ですよ。」

私はこの突發事件が何であろうかを知る爲に熱心に群衆の會話を聽いてゐた。

さうしてゐる中に、私は必ず何處かで、これと同樣の事件、寸分違はない出來事に遭遇した事があるやうに思へて來た。

何處かで！　確に何處かで！　遠い過去だつたか、夢の中にだつたか……

然しそれは私の混迷でも錯覺でもない。

鐵骨の上に橫へられた足、あれは昔若かつた父の、農村から都會へと、勞働と幸福を求めていつた、煉獄の姿としての、私の心の壁畫だつたから……

私は眠つてゐるのか覺めてゐるのか？

頭の上で鋲締機が鳴りつゞける。

鉛色の蹠が二つ、私の網膜に貼りついてゐる。氣味の惡い、象形文字のやうな指紋がある。

黑い傷痕がある。深い溝がある。

黑い夢だ！　黑い夢だ！何てピストルの銃口を覗くやうな油臭い夢だろう——私は夢から遁

れやうと足掻いた。

そこは平原の黎明だつた。

父と母と規則正しい足取りで、影繪のやうに、紫色の線上を歩いてゆく。

彼等は蝸牛のやうに小さな自作農だつた。

私は祖母の背中に蝉みたいに喰つ着いて、大きい土瓶と一緒に隨いてゆく。野良へ——

露に濡れた玉蜀黍の葉ばかり、夜會服の貴婦人みたいに、さらさらさら……とそよぐ。

毎日毎日雨が、茅葺屋根の農家を浸した。

若い父は古い木の根株の上で、千本削つて何厘といふやうな楊子をそいでゐた。

電光のやうな鋭利な刃物で、若い生命を削つてゐた。時々溜息を吐いて空を見たり、白い眼をして放心したりしてゐた。彼はその時小作人だつた。

若い母は、蓮根のやうな腕をして製糸工場へ通つた。その頃街には、製糸工場の煙突と肥料屋の倉庫が殖えた。

太い煙突から黒龍のやうに空へ登つてゆく煤煙の下で、若い母は屑糸を出して罰しられながら喘いでゐた。

そこへ猿みたいな赤ん坊が生れた。

毎年、續けさまに生れた。

然し私の可愛い乳兄弟達は、新月のやうな薄眼をして崇高な寢息をたてながら、巴旦杏のやうに成熟していつた。

寒い晩、私は子供達と、穴の中の藁苞に貯えてある銀杏の實を出して、爐の縁で燒いて食べた。父は何時でも厚ぼつたい唇を開けて默りこくつてゐる。

狹い家の中で鬱してくると、私は直ぐ下の男の兒をいぢめた。

「姉こう！　さあ、やつてこい姉こう。」

彼はむきになつて攻勢をとる。

私は彼が男の兒であるのと、自分が彼よりも年嵩なのを好い事にして、徹底的に征服しやうと試みる。小さい子供達も一齊に暴れ出す。小さい家の中で子供等は益々狂暴になつて、楊子削りのナイフを振り廻して私に迫つてくる。私は芳ばしい楊子の樹を噛みながら惡口をいつて逃げ出す。

若い父はいつの間にか野良へ出てゆかなくなつた。行商を始めて見たのだつた。

雨が降つて毎日父が家にゐる時は、入口の土間に桐油を被た、玩具や雜貨の荷が、生活の殘骸のやうに骨ばつて積んであつた。

それからまた父は行商を止めて、すてきに好い事を始めた。子供達にも好い仕事が與へられた。それは煉瓦工場の土擔ぎだつた。

「今日はちやあや（父のこと）の辨當を持つてゆくの私だよ。」

「うゝん今日は俺だ。」

「昨日お前が持つて行つたんぢやないか」

「嘘つけ、おらはたゞお前に隨いていつたんだ、今日こさ、俺一人でいぐ！」

子供は大臣のオフイスにでも行つて見るやうに、父の働いてる工場にいつて見たがつた。

皆で祖母の作つたお辨當を奪ひあつた後、結局皆でぞろぞろと長い松原を歩いていつた。

野の中に蛇の目傘を擴げたやうな穹窿形の屋根が三つ、青麥の波の上に泛んでゐる。

そこは、下野煉瓦製造工場。

子供等は門の中へ入つてお辨當を置いてくると、急いで出て來て川向ふへ廻つた。

圓い工場の丘を半分抱いて流れてる川の水は、土を搬んでくる小舟の爲に攪亂されて濁つてゐた。

開け放たれた窓の奥に、高い天井から斜めに廻轉してる調帶（ベルト）の一部が、長蛇のやうに見えてゐた。そこから間斷なく切り出される大きい羊羹のやうな長方形の土塊は屋外に搬び出されると、手拭を冠つた女達の手に、一箇一箇と莚の上に並べられた。

甘さうな水分を含んだ、しつとりとしたお菓子が、規帳面に並んだ上を、白い雲の集團が煤

色の影を落しながら飛んでゆく。

炎天下に勞作する男女の群を、子供等は何にも知らずに繪のやうに眺めた。その風景は長閑な異國的な情緒さへ私達に傳へた。

子供等は土擔ぎの眞ッ黒な人夫の群の中から若い父親を見出すと、小鳥のやうに口をあいて聲を揃えて

「お父つつあん――」

と一齊に呼ぶのだ。二三度呼ぶと、父は對岸の子供の方をチラッと振り向いて、愛情の籠つたむづがゆいやうな微笑を傾けた。

百姓から行商人へ、それから勞働者へと境遇の變つていつた父の、工場を背景にして働く姿は、どんなに輝やかしく男性的に子供等の瞳へ映つたろう。だが、その古い印袢天の下に穿いた、汗と垢に汚れた白木綿のズボンが、べたべたと父の下半身に絡みついて、それがおそろしく父の足許を疲勞してゐるやうに見せた。

私は貧しさに沒してゐる間は、自分の貧しさを知らなかつたが、學齡までといふ生家と里親との約束の期限が來て、とうとう私はこの若い貧しい、然し温い父母の懷中から切斷されてしまつた。それは全く血の滲むやうな苦悶だつた。

「×さん、もうあの貧乏家へはいかないがいゝよ、虱が泳いでゐるよ。」

誰も口を揃えて貧しい父母を侮蔑した。

さういはれて見ると實際、私の愛する弟妹達の髪の毛には、粉雪のやうに白い細かい虱が根深く喰ひこんでゐるのが眼に見える。

「虱なんか、たけてくると傍迷惑だよ、第一着物が臭くなるから、あんな家へいかない方がいゝよ」

「お前が、彼邊の貧乏屋で、かけたお碗でけんちん汁か何か食べてた姿を見たものがあるか？もしあればその人はそれつきりお前に愛想を盡かしてるぜ、まるで乞食の子だ、俺なんか沁々お前が厭んなつちやつたぜ……」

「夕方になると彼處の乞食婆がね、×ちやんに逢ひたくつて、×ちやんの家の前を幾度も往き來してんだよ、まるで偸人みたいな婆あだつて、ほんとかい？」

皆の揶揄が小さい私の心を寸斷した。

夕方私が家の窓から往來を覗くと、祖母が向ふの油倉の蔭にかくれて手招ぎをしてゐた。

私は彼方を見、此方を見ながら、祖母の傍へ駈け寄つていつた。

始終蜆の貝のやうに爛れてゐる眼のそばへ、くつつけるやうに茶の毛糸の巾着を持つていつて、その中から銅貨を二つ三つつまみ出して私の手のひらに載せた。

祖母は祖母で村の人の使ひや洗濯をして、僅かな金を得てゐるのだつた。

それから祖母は、毎日毎日來て、お小遣を置いていつた。私はその祖母の血滴のやうな錢で、家から禁じられてる駄菓子の買喰ひをして、小さい慾望を滿足さした。

毎晩十二時になると、私は急に夜具を蹴上げて飛び起きた。「わあつ！」といふ叫びを擧げながら、あらゆる障害物を飛び踰えて、往來へと突進した。危ぶない！　危ぶない！家の者や近所の者は、何處まで駈け出してゆくか解らない私を抱き止めて、また寢床の中へ連れ戻した。私は何にも意識しないで、その儘靜かな眠りを續けるのだつた。

私はいつも覺めてゐる時も寢てゐる時も、乳母や乳弟妹（ちきやうだい）に呼びかけられてゐるやうで少しもおちつかなかつた。始めは僅かな養育料の爲に繫がれた私達だつたが、とうとう切り放せない一つのものになつてしまつたのだつた。

そして彼の家の赤貧は、少さい私の重荷になつて、一層私を貧に對して神經質にした。

何時からともなく祖母は姿を見せなくなつた。病氣でもしてゐるのではないかと思つた。すると製糸工場へ行つてゐる母が、祖母も夫も子供も棄てゝ何處かへ行つてしまつたといふ噂が街中に擴がつた。

私は祖母に遇ひたくても、彼の家とは往來を禁じられてゐて、どう脱け出してゆく事もできなかつた。それは皆彼の家が餘り貧乏な故にだつた。

私は毎日、彼の家の頭上にある、淨土寺の公孫樹に夕陽の蒼ざめてゆくのを、野の彼方から眺めてゐた。

祖母はやつぱり病氣だつた。

もう長い事寢てゐたのだ。暗い空家のやうな家の中に空虚な眼をあけて寢てゐた。

「淋しかあないのかえお婆さん。」

祖母は無表情で首を動かした。

そして、水を貰ひたいといふ意味の事を、やつと私は聽きとつた。

小さな茶碗に、私は井戸から水を汲んで來て飮ませると、祖母は滿足さうに眼を瞑ぢて見せた。

その日から二三日の後に祖母は死んだ。

子供の騷々しく遊んでゐる中で、壁の方を向いたきり、それなり死んでしまつた。

私はたゞ切り倒された枯木のやうに横たはつてゐる屍骸を見たばかりだつた。

葬式の日に子供等の母は、何處からか歸つて來た。

口紅を眞ッ赤につけて、大きいお腹をして歸つて來た。尤も彼女のは地腹だつたかも知れない。何時も骨盤の上で腰紐がその膨脹をやつと支えてゐるやうな腹部と、河童のやうな子供達と、その生活の切なさを見ると、私は何か底の知れない不安を感じさせられた。醜い腫瘤にさへも見えた。

地獄で天國の話をするやうに彼女は都會の生活を喋つて歩いた。それも場末の下宿屋か何かを中心にしての都會生活だつた。

都會では少しの智慧と猾ささへ持ち合せれば、自動車も電車も無料で乘り廻せて、芝居でも活動でも常に見られて、男は口頭で女は媚で、何時でも生活が樂にできる……と。

あゝ私のマドンナは一度都會を見てくるとすつかり墮落した精神を持つて歸つた。

父は祖母が死んでから仕事にも出ないで、毎日鬱ぎ込んでゐた。この頃は窪んだ眼の下で、赤い頬骨が莫迦に險惡に光つてた。

「俺にも少し文句がある‼」

胡坐を組んで空間を睨めながら時々、火を吐くやうな勢ひでこういつてゐたが、生れつき無口な素直な彼は、それ以外何にも口に出さなかつた。

雨が降り續いて、子供が遊びに倦きてくると、彼は疊の上に仰向けに寢て、兩方の蹠の上に私を載せて、上げたり垂げたりシーソーの代りになつて根氣よく遊んでくれた。彼は若いやさしい父だつた。

「お父つあん、お前がこの土地を見切つて東京へ行ぐ氣にさなれば、子供等もおらもどんなに助かるか知れやしねえ。お前が出てくりや直ぐにでも××工場へ入れるやうにしといてやると×さんもいつてるでなえか、それに彼處は仕事も樂だし社宅もくれべえつて話だに……」

彼女は幾度も寡默な夫を唆してゐた。そして間もなく、夫や子供達をひつ浚ふやうにして東

京へいつてしまつた。その後、私は一度も彼等育てゝくれた親にも乳きやうだいにも逢はない。やつぱり彼等は煉獄から煉獄への道を踏み迷つてゐるだろう。

鐵骨ばかりのビルヂングの下で二人の男が上を見上げながら話してゐた。

「何てえ鈍間な野郎だツ、建築つて奴あ、一度ケチがつきやあがると、それからそれへと縁起が悪くつて、碌なこたありやあしね、危險なこたあ解り切つてるのに、餘ッ程、ドヂな野郎ぢやねえか……」

「何でもふだんから俺あ、のろまな野郎だとおもつてた……」

詰襟の服にゲートルを捲いてる技師らしい男と、アルパカのもぢりみたいなものを、ふわりと上から羽織つた親方らしい男と、鉛色の瞼を見上げて怒罵を浴せてゐた。

何時？　何處から？　どうして？　その足は歩きつゞけて來たゞろう。その足は、都會に幸福を求めていつた父の足だ、ブルジョアジイが嚙んで吐き出すやうな食物を求める爲に、生涯の血と汗とを拂はなければならないあの父と子供の足だ！

今に今にあの足は、ビルヂングの鐵骨の上から立ち上つて、何千何萬何億もの足と一緒に、全世界の軍隊よりも歩調を合せて、一つの行進曲を奏するだろう。私の頭の上では、矢ッ張り激しく鋲締機が鳴り喚いてゐる。

……私は一體、睡つてゐるのか、覺めてゐるのか……。

青空文庫情報

底本：「解放10月号」解放社
　　1926（大正15）年10月1日発行
入力：林幸雄
校正：大野裕
2001年1月17日公開
2001年1月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梁上の足

若杉鳥子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/